

第3期札幌文化芸術円卓会議  
第6回会議

会 議 録

日 時：平成26年11月11日（火）午後6時開会  
場 所：札幌市役所本庁舎 6階 1号会議室

## 1. 開 会

○事務局（加茂市民文化課長） それでは、6時になりました。

定刻になりましたので、第3回札幌文化芸術円卓会議の第6回目を開催したいと思えます。

本日も、皆様、お忙しい中をお集りいただきまして、まことにありがとうございます。

それでは、早速でございますが、委員長、副委員長にマイクに渡したいと思えます。どうぞよろしくお願いいたします。

## 2. 議 事

○北村委員長 こんにちは。

今回と次回で市長に提出する文案を出さなければいけないので、実質的には今回が（報告書の内容議論の）最後になります。皆さん、よろしくお願いいたします。

最初に、石川委員、お忙しい中をコンシェルジュについておまとめいただき、どうもありがとうございました。

私も文書をつくろうと思ったのですが、うまくできませんでしたので、今日の議事は、前半に報告書でどういうことをまとめるのかという骨子を考えていただいた後、もう少し具体的に詰めて中身を合意していただきたいと思えます。

本日は、尾崎委員が7時にご退席されるので、早速、進行したいと思えます。

石川委員につくっていただきましたコンシェルジュについて、統合版が皆さんのところに届いたかと思えます。また、事務局からは、これまで私たちが議論したさまざまな事業の分布状況や具体的な事業のテーマの資料の文書が届いております。もう一枚、先ほど私がどさくさ紛れにつくったもので、大変申しわけないのですが、A4判の表裏で北村素案というものがあります。これも、後ほど何かの参考にさせていただければいいかと思えます。

早速ですが、石川委員のコンシェルジュについてまとめていただいたことを踏まえながら、私たち第3期の円卓会議がどういう提言をすればいいのか、その骨子をどうするのかについて、骨子案をつくられた石川委員から、5分ぐらいで簡単にお話しいただけますか。

○石川委員 私の書きたいことをここに書きました。また、色々な方に貴重なご意見をいただいたので、基本的にはこうしたらいいのではないかといいところは、もうそれでいいと思っています。あとは、これは私から意見を言ったほうがいいかなというところだけを言わせていただきます。

最初のページに、山田委員から、定義とは別に理念があったほうがいいのではないかといいところは、おっしゃるとおりだと思えます。

それから、次のページに行くと、ここに書かれている意見は、本当にこのとおりなので、いいと思えます。

もう一つ、下の丸で、鈴木委員からデジタルコンテンツのアートコンシェルジュグルー

プのc a k e sはどうかというところがありました。これは、僕も初めて見たのですが、おもしろいと思います。フェイスブックと、ウェブサイトもあるのですけれども、色々な情報が寄せ集められて発信していくということです。そこに書いてあるとおり、女性を載せるなどして、読みやすい、取っつきやすいものになっているので、これはいいと思います。

その下の富田委員からの両者をつなぐ双方向性ということも、当然あるべきだと思います。

その次のページにある皆様のご指摘は、本当におっしゃるとおりです。

その次のところで、鈴木委員から、c a k e sが石川委員のイメージの理想形態なのかとありますが、c a k e sが理想になるかどうかは、正直に言ってよくわかりません。ただ、色々な情報がアップされていて、リアルタイムで札幌のアートの情報がどんどんアップされている構造自体はすごくいいと思います。

その次のページは、「メディアとして」という部分です。これは、おっしゃるとおりで、私がメディアを色々つくっているものですから、すぐに「メディア」という言葉を使っていますが、「市民目線」とか、清水委員の言われる「一般受け」という言葉を使うこと自体は全く問題ないと思います。その下の鈴木委員のボランティアの活用というのは、私も本当に賛成です。

ほかについても、基本的に賛成で、全く問題ありません。

その次のページの札幌アートマンは、「アートコンシェルジェ」という名前にこだわらないというのは私も賛成です。逆に、「コンシェルジェ」という言葉ではわかりづらいと思うので、ネーミングは積極的に考えたいです。

次のページは、尾崎委員の話ですが、海外特派員は素晴らしいアイデアだと思います。絶対にいたほうがいいと思います。僕は、かねがね、札幌のホームページは全部をバイリンガル仕様にしたと思っています。札幌という都市は、世界的に見ても結構注目されているところがあるようなので、海外に向けて札幌のアートをアピールすることはすごく大事だと思います。

その次のページの清水委員の紙媒体に関してということは全く問題ありません。

鈴木委員のドワンゴのニコニコ動画とかツイキャス、ユーチューブといった無料で使えるツールをどんどん積極的に使うことは、予算の枠組みから外れて色々できることなので、お金のかからない方法で色々なアートのコンテンツをどんどん発信していくことはすごく重要だと思っています。

その下の質問対応については、確かに、質問という難しいイメージもあると思いますので、問い合わせ対応にさせていただくことも全く問題ないと思います。

その次のページのご指摘部分も、取材によって色々と新規開拓をしていくということです。ただ、取材には営業力のある人材は、本当に検討すべきことだと思います。

清水委員からのご指摘や山田委員の検討事項は、そのとおりだと思います。

次のページの南副委員長のところですが、アートコンシェルジュという器で全てをまとめるのは無理があるのではないかというのは、おっしゃるとおりで、私も無理だと思います。

それから、南副委員長のところの三つ目ですが、一方で「『創造都市の実質化』に必要な素材（素養）はすでに揃っている」というのは、私も変な書き方をしてしまいました。これは不適當な発言だと思います。僕の言うニュアンスとしては、札幌は、芸術の森もあるし、K i t a r aもあるし、モエレ沼もあるし、アート活動をしている人も結構いるし、いい感じではないかという程度です。ただ、こういう書き方をすると、ご指摘のとおり、それがそろっているのだったら、コンシェルジュは別に要らないのではないかということになるので、これはなくても問題がないと思います。

あとは、後々に書いておられる営業力とか、まちに浸透するということは、私もすごく賛成ですし、次のページに書いてあることも、全く問題なく賛成です。

最後に私の一言を言わせていただくと、コンシェルジュというのは、一つの実験であると思いますし、やってみなければわからないこともたくさんあると思うので、アートコンシェルジュという案そのものも、ある程度ざっくりしていてもいいのではないかと思います。

やはり、アートコンシェルジュの本質としては広報です。営業的なことも含めての最大の広報機能であるということと、ほかの方のご意見にもあるように、もっとアカデミックな一流の講師の方を呼ぶといった施設をつくることも大事だと思いますが、僕が一番大事だと思うのは、札幌市民一人一人が札幌は創造都市だということを認識してもらうことが一番重要だと思っています。まずは、アートコンシェルジュという仕組みを通して、札幌市民に、札幌は創造都市という方向に向かっていくという認識をしてもらうことが何よりも大事だという意味で、アートコンシェルジュをイメージしております。

ですから、私の中のイメージは、創造都市は素晴らしい施設やアーティストがいるからつくられるわけではないということです。もちろん、それも必要ですけども、そこで生活する一人一人が札幌は創造都市なのだとして認識するところから始まるのではないかと考えております。私のアートコンシェルジュのイメージは、基本的に底上げです。まだ知らない人に向けてというイメージで考えさせていただきました。

以上です。

○北川委員長 ありがとうございます。

皆さんからご意見をお伺いしたいと思います。

尾崎委員、お願いします。

○尾崎委員 僕も、この会議を通して、どうにも自分の頭の中で具体的にできなかったものが、石川委員の「メディアであるべきではないだろうか」という言葉で、本当になるほど思わせてもらいました。自分の中で言葉としてまとめられなかったものが、そうなることによって随分と明確に見えてきたなというのが私の思いです。

個々に関しては、みんなで肉づけをしていく形でよくなっていくのではないかと考えておりますし、一番最初に何でアートコンシェルジュの話になっていったのかということ、そういう組織があることによって、会議の前半のほうで出ていた札幌の文化芸術行政に対して足りていないものは何だろうかと話合っていた中の一部分が補える可能性が見えてきなという感想です。

これが本当にできていくといいと思いますし、恐らく、アートセンターとは離せない内容になっていくのでしょうから、この円卓会議ではそこまで考える必要はないと思いますが、僕としては、この形で進めていくことはすばらしいことだと思います。

○北村委員 その場合、尾崎委員のメディアというのはどういうイメージですか。メディアだということがわかったというのはどういうことでしょうか。

○尾崎委員 おっしゃるとおり、広報から実際の事業部も当然ありますね。紙媒体でも広がっていくし、当然、ネットの媒体でも広がりを見せていきます。それと同時に、ただ情報を流すのではなく、これも石川委員がおっしゃっていましたが、編集する能力を持って、ただただ集まった情報を羅列していくのではなく、必要なところに、より効果的なところに必要な情報を配信できるような編集能力を持ったところになっていくべきだと思います。

僕が最初のほうに言っていた観光情報文化ステーションは、本当にただ情報が並べてあるだけです。やはり、あれでは能がないと思いますので、そういったものからさらに発展していったものになるといいなと思っています。

○北村委員長 ありがとうございます。

清水委員、どうぞ。

○清水委員 私は、前回、メールで送付していただいた資料で、南副委員長がおっしゃるように、アートコンシェルジュで全てをまとめるのではなくというところは、ああ、そうかと思いました。でも、今回、まだ読み切っていないのですが、北村委員長が骨子をつくってくださったのに、アートコンシェルジュのみでなく色々も含んでまとまっていくのではないかと考えました。そして、アートコンシェルジュ以外の今までの議論をどういうふうに含んでいくのか、これから考えていかなければいけないと思います。

私として気になったのは、南副委員長が寛容性というキーワードに注目してくださったので、これをどう含んでいくのかですね。今回の委員長の骨子は、まだ最初しか読んでいないですけども、北村委員長の素案の2番の2、3の「アートや創造性は価値観の多様性に寛容的である」という文があります。これは、多様性や寛容性をどう含んでいけるのか、結構難しいところかと思っています。寛容的というのは、すごくコンサバではなくてラジカルなところで、創造都市にはすごく大事なことですけども、行政的な感じで、こういうものをうまく含んでいくのが難しいなと思いながら見ていました。

○北村委員長 ありがとうございます。

鈴木委員、どうですか。

○鈴木委員 まず、まとまった状態を見て、その上で皆さんの意見を見ると、自分の頭の中でも整理されて、まとめに入ってきたのだなと改めて実感しました。

意見の中で一番いいなと思ったのは、尾崎委員の意見ですが、海外の方を呼んで一緒に作り上げていくというところですか。人員配置という意味で、海外の方を呼ぶのは、新しい考え方だなと思いました。先ほど石川委員がおっしゃっていたように、札幌市は海外からも新婚旅行で使われるような都市だったりするので、これはいいなと思いました。

私がメディアに関して述べたところは、皆さんに結構な量のデータをお送りしたと思います。私は、学生ということと、20代ということもあったので、これからは観光都市だというふうに発信する力を一番持っているのは20代、30代、40代だと思います。ネットを多く使っているのは、データを見た限りでは、若年層の方がとても多いので、どういふふうにご利用すると、北海道外の人にも知っていただけるような取り組みがつかれるのかを考えたら、やはり、ニコニコ動画やフェイスブックを活用したほうがいいのではないかと思います。

以上です。

○北村委員長 ありがとうございます。

富田委員、どうですか。

○富田委員 これを一通り見た感想です。

やはり、コンシェルジュにフォーカスしてかなり話をしていたと思います。大事なことというか、なぜそこにフォーカスしたかということも含めて考えると、やはり、ここに集まっていた人たちの意見の中でも、先ほどメディアの話もしましたが、やはり声が届いていないのではないかと、アートにかかわっている人たちもそれがうまく理解されていないのではないかと、魅力をうまく届けていないのではないかと、だから、そういうコンシェルジュが必要だという形になったのかもしれない。

どうしても考えなければいけないのは、アートにはアートの持つ意味があって、多分、根本的に言えばさっき言ったラジカルなこととかコンサバなことがあるのですけれども、僕はアートというのは多様性や寛容性を試すことができるものだと思っているのです。話はちょっと難しいのですけれども、寛容度や多様度が試されるのは、例えば経済だったり思想だったりしますが、そこに、これはどうなのだろうと揺さ振りかけることができると思います。

ですから、そういうことを通して、先ほど底上げと言いましたけれども、何をもちて底上げなのか、本当に経済が成り立っていればアートとしては底上げなのかと言われたら、それだけではないと思います。パブリックという話をしたときには、公共の概念がどこよりも新しく、みんなが共有されていて、サービス、観光がしっかりしている、教育ではすごく新しい試みをして独自の考え方を持っているところまでアートがつながるきっかけになると考えております。そういう意味では、すごく重要だと思います。

ですから、コンシェルジュというのは、大きな仕組みの中の一つでしかなくて、その仕

組みをこれからどういうふうに考えていくかといったときに、その入り口をポータルという言い方をしますけれども、アートの入り口になって、北村委員長が書いていたように、日常性とどういうふううまくやっていくかというところからどんどん関心を持ち、意識を高めていくような方向づけで、何がアートで、何がアートではないか、根本的な問題ですけれども、そこら辺をしっかりわかった上で情報を発信していく、メディアを使っていくということではいけないと思います。ただ表面的な情報を垂れ流しているだけでは、余りおもしろいことにはならないのではないかと思います。

結論ではないのですけれども、僕がもやもやしたところで、わかりやすいとか、楽しいはいいのですが、それは抱えている問題がたくさんあるので、そこにどういうふうに道筋をつけていくかということが重要だと思いました。

○北村委員長 ありがとうございます。

山田委員、どうでしょうか。

○山田委員 まず、石川委員がまとめてくださったことに感謝しています。私は、前回の会議が終わってから考えても、全然まとまりませんでした。皆さんのアイデアをお聞きして、これもいいな、あれもいいなと思いつつも、四方八方で、なかなかまとめられませんでした。まずは、アートコンシェルジュを中心にまとめていただいたことに、本当に感謝を申し上げます。

そして、メディアについて思ったのは、報告書骨子【統合版】の第3（各論1）「メディア」にあります情報発信、それから、受け手と受け手をつなぐものがメインになるのではないかと考えています。まずは、情報発信したものが受け手に伝わらないところをいかにコンシェルジュ機能で伝えていくかが一つ大きなことです。それがメディアと言っているのではないかと思います。

二つ目として、全体的に、今こうやって札幌アートコンシェルジュを骨太にして、中心になりますけれども、統合版の骨子の後ろから2ページのところに、南副委員長の文があります。先ほど石川委員のお話にもありましたが、真ん中辺に、「『アートの都市として札幌をブランド化する』というのが『実質化』の戦略だと考えています」とあります。そこで、アートコンシェルジュは中の中心部分で、そこにも「提言タイトルが」とありますけれども、一番アートの都市として、札幌をブランド化するということをどんと正面に持って行って、その中でアートコンシェルジュをまとめていくと、話の道筋としてはとてもいいなと思います。続けて、南副委員長のご意見の真ん中あたりから下にございますけれども、コンシェルジュ・ネットワークとか、具体的な例も入れていくと、さらに骨太になると思っています。

最後に、メールでいただいた北村委員長の報告書草稿の一番下の段から、それぞれ各論のところ、こういう課題だからこうあったほうがいいというものがありますが、最後にも、課題といいますか、次につながるものを載せていくと、円卓会議の提案ができていくのではないかと思います。

簡単ですけども、以上です。

○北村委員長 ありがとうございます。

尹委員、お願いします。

○尹委員 皆さんもおっしゃっているのですけれども、このようにまとめていただいて、本当に感謝しています。私が実際にまとめようと思ったら、ここまでまとめられません。皆さんのお話を聞いたり、議論をすればするほど、どんどん難しくなっていくというか、皆さんがおっしゃっていること全てが正解のような気がするのですが、どんどん広がっていく感じがするので、どこをどうまとめるのかというところがあります。

私は、メディアというところでどう宣伝していくか、一番効果的なものは何かと考えていくと、鈴木委員がまとめてくれたデータを見ても、年代別に見る媒体も違ったり、手段も違ったりしますので、一概にこれがいい、あれがいいとは言い切れません。表現はおかしいですが、人海戦術といいますか、地道にやっていくしかないと思いました。色々なところを利用してどんどん発信していくしかないかなということが一つです。

アートと言ったら色々だと思いますけれども、私は、単純に、おもしろいことを仕掛けていくと、一番食いつきがいいと思います。人はみんなそれぞれ感性も違いますし、楽しいと思うことも違いますので、色々な人たちが色々な提案をして、色々なおもしろい仕掛けをしていくことを考えていって、それをどんどん媒体で呼びかけていくという単純な作業のような気がします。色々な話を聞いていると、もっと単純なような気がしてしょうがないです。その楽しい仕掛けを、小さいことから大きいことまで考えていって、それをどんどん宣伝して、どんどん浸透していかせるしかないような気がします。

その仕掛けとして、海外から専門的な人を呼ぶということも大事ですし、本当に突拍子のない発想も楽しいと思います。少し前にテレビでやっていたのですが、アート集団の方々が、市かどこかから依頼されて、夜中に、中学校の黒板にチョークで、この教室は宇宙をテーマにした絵、この教室は別のものをテーマにした絵と、それぞれ描いていくのです。そして、朝、子どもたちが学校に来たら、それを見てすごく驚いて、その中でアートに興味を持つ子が一人でも多く出てくればいいという仕掛けです。それは、朝の一瞬で全部消してしまって、すごくはかないのですが、それがアートなのだろうなとも思うのです。

そういった突拍子もない仕掛けで、言い方はおかしいですが、食いつく子が一人でもいればいいのではないかなと思うのです。そういう地道な作業という点で、急がずにゆっくりと楽しいことを仕掛けながら、それを色々な媒体で呼びかけていくという単純なところから考えていったほうがわかりやすいのではないかなという気がしました。

結局、私もまとめ切れていないのですが、単純にそういうふうに思いました。

○南副委員長 南です。

まず、石川委員、本当にご苦労さまでした。ありがとうございます。

これがあって、アートコンシェルジュとは一体どのようなものか、皆さん具体的に考えていただけたので、これに関しては、このぐらいでいいのではないかなと思っています。

今、ここでコンシェルジュを実際に立ち上げるという問題ではないので、これが全体の中でどういうふうになっているのかということを考えなければならないのです。

今、富田委員がアートとは一体何なのかと突っ込んだ話をされたのですが、ここを突っ込んでしまうと、どうしようもない世界に入ってってしまうと思います。ですから、その辺は突っ込まないでやったほうがいいのかと私は思っています。

ただ、間違いなく、アートを楽しむためにはどうしたらいいかというのは、ある意味で寛容性という問題とかかわってくるわけです。富田委員の言い方をすれば、そういったものがあることが許されるとか、いつもこのようにやらなければならないとか、このようにやるように決まっているといったものにくさびがかかるというか、ひっかけてくるものがアートなわけです。ですから、おもしろいではないかというものを許可するような体制をどうつくっていくか、また、そういうふうにしてもいいではないか、あるいは、これは困るでしょうという市民のクレームを都市としてどのように消化するか、そういった方策だと思えます。それを提案の中で具体的に引き出していくことができればいいなと思っています。

○北村委員長 ありがとうございます。

私もまとめられないのですが、石川委員がコンシェルジュについてまとめていただいたことに対して、なぜコンシェルジュという問題が出てきたのか、まず、その背景を前段で書かなければいけないだろうと思います。南副委員長がおっしゃるとおり、ここだけで議論が完結しないでしょうということがあります。

それから、創造都市さっぽろというのは、別組織の実行委員会がありまして、そこからやがてアートセンターができるのでしょけれども、そういったところとの関係性にどう整合性を持たせるかということがあると思っていました。

石川委員に書いていただいた細かなところはいいのですが、拝読して、メディアでやるということ、若い鈴木委員はすぐネットワークにつなげて考えることができるかもしれませんが、清水委員は紙媒体のことも書かれていましたね。ですから、色々なことを考えて、私なりにコンシェルジュを考えてみました。編集、取材、企画というのは、石川委員がおっしゃるとおり、情報を集めて垂れ流すだけでなく、それをどういうふう加工して届けるのかを考えた場合、ウェブ上のメディアでも紙媒体のメディアでもいいのですけれども、情報編集局みたいなことなのかと思っていました。

僕は、コンシェルジュという言葉がずっとひっかかっているのですが、尾崎委員の話だと観光情報センターが集めて配付しているだけですが、それをもう少し有効に生かして、情報を編集し、記事を書き、企画を立て、論説し、解説し、海外に発信し、海外から呼んできてということを見ると、新聞社の文化部の札幌芸術特区版のようなことなのかと思いました。

私はつらつらと書いたので文章のまとまりがないのですが、きょうお配りした裏表の素案を見ていただければと思います。

1番は、これまでの議論の経緯です。1回目の円卓会議、2回目の円卓会議、3回目はみんなでブレインストーミングをしながら、どんな事業計画があるのかという網羅的なものをつくりました。そのころに国際芸術祭が始まったのですが、私たちに情報がなかなか伝わってこないのは何でだろうというところで、コンシェルジュの話が出てきたのかと思います。だから、コンシェルジュが出てきた背景というか、必然性みたいなものがなくて、いきなりコンシェルジュが必要だと言われても、円卓会議はどういうつもりで議論をしていたかがわからないので、そこは丁寧に必然性や必要性は書かなければいけないだろうと思います。

そこで、機能的にやったところで議論が拡散してしまうので、何か理念的なものが必要でしょうかということで前はまとめさせてもらいましたが、2番の基本的な考え方をここでもう一回確認していただければと思います。これは私の考え方ですが、先ほどいい言葉を見つけました。南副委員長の「アートの都市としての札幌をブランド化する」がいいと思いました。要するに、私たちの日常性の中に、あるいは、都市の生活の中に、社会の生活の中にアートとか創造性といったものが、皆さんは気づいていないかもしれないけれども、深く深くかかっているのですよということは何とか伝えたい、石川委員の言い方をすると、底上げをしたいということかだと思います。

人ごとではありませんよ、私はアーティストではないし、クリエイティビティーなんかがないと言うけれども、そうではない、そんなに難しく考えなくてもいいということです。そこで新たに問題になってくるのは、プロフェッショナルとアマチュアではクオリティーが違うという問題が出てくるとは思いますが、そこは横に置いておいて、私たちみんながアートとかクリエイティビティーと深くかかわらない限り、生活そのものが成り立たないのだということを強いメッセージとして伝えたいということです。それは、南副委員長の言う「アートの都市としての札幌をブランド化」でいいと思います。

2. 3は、先ほどから何回か出ている多様性に関する寛容性の問題です。

2. 4は、私がいつも考えていることですけれども、課題解決型のアートプロジェクトみたいなものをやれないのかということです。できるかどうかわかりませんが、第3期の円卓会議の理念的なことを考えて、そういう中からコンシェルジュ的なものが出てきたのだということです。

問題はどこにあるかということ、3のところでは、アートは特別なものではないことに気づくことができるか、創造都市さっぽろと言われながら、それは何かということにとどまっているので、それをもう少し何とかしなければいけないだろうと思います。

3. 3は、アートに関する必要な情報を必要な人に届けるということで、広報活動とか営業力というのは皆さんがおっしゃるとおりです。

アートセンターができるということで、最初の議論では、さっさとアートセンターを機能させてしまったらどうかという話も出ました。全部できるかどうかはわかりませんが、私の考え方としては、アートセンターの役割の機能の一部として、アートコンシェルジュ

的なものをなるべく早くやってみたらどうでしょうかと。そこでアートコンシェルジュの話が出てくるかなというところです。

解決の方向性で、アートの問題と、裏には創造性のクリエイティビティーの問題と、アートセンターの早期の運用で、受け取り方が違うかもしれませんが、アート情報編集局みたいなところで、アートコンシェルジュ的に、先ほど石川委員にまとめていただいた編集、企画、取材、もちろん広報、営業などの仕事をやるということです。コンシェルジュというよりも、アート記者、アート編集者、アートの広報者というイメージでやるともう少しわかりやすいと思います。ウェブ担当者もいるのです。もう少し具体的に考えると、月刊でフリーペーパーみたいなものをつくってしまう。あるいは、フリーペーパーではなくても、数万部単位でそれを配付できるようなものですね。誰に配付するかというと、会員になってもらうとか、ウェブマガジンに登録してもらって、その会員になれば何かしらの特典がついて、入場料が割引になるとか、早目にチケットが入手できるとか、多少のメリット、特典をつけて、会員を数万規模で集めて、そこに情報を届けるということです。190万人の市民でやれば、10万人ぐらいをめどに頑張れば登録できればいいなと考えました。

ただ、このコンシェルジュを組織的に考えたときに、誰がやるのか、どこがやるのかという問題です。アートセンターができますが、その議論は私たち円卓会議とは別のところで進行していると思います。札幌市役所が直営でやるか、民間に委託するか、NPOをつくるか色々考えてみましたが、多分、落ちつくところは、山田委員のところに行くのではないかと思います。

○山田委員 広報の一つですね。

○北村委員長 広報の一つというよりも、今、芸術文化財団は、K i t a r aを担当している方がいたり、教文の担当がいたり、芸森の担当がいます。前に、それが連携して行うことはあるのですかと聞きました。二、三の例は伺ったのですが、財団全体として連動することが余りないように思います。そこにアートセンター担当部局みたいなものが並列的になっても、これは組織が大きくなるだけです。例えば、芸術文化財団には「教文ニュース」「K i t a r a NEWS」というものもありますね。少なくとも、財団がつくっているペーパーなんかを全部統合して、先ほど尾崎委員からバレエの案内をいただきましたけれども、ウェブであれば直近できょうの公演情報みたいなものは流せると思います。月間の情報誌などをつくって、それは教文も芸森もK i t a r aも市民ギャラリーも財団が担当しているところ、それ以外の市内のギャラリーとか500m美術館とか近美、あるいは、K i t a r aであっても札幌のことは関係ないですね。いわば、札幌で行われている芸術の情報を網羅的に編集、企画するような、財団の中で組織を横断するような形でのコンシェルジュなどではないと、多分、財団のほうにアートセンターが行っても組織が大きくなるだけで、アートセンターニュースみたいなものが別に出るだけです。それを見ても、アートセンターの舞台で行われることはわかるけれども、教文で行われることはわ

からないとか、K i t a r aで札幌のことがわからないということになってしまって、必要な情報はやはり必要な人には届かないということです。

ですから、財団の組織の改編まで含めてやらないと、多分、有効性を持たないのではないかというふうにも思いました。

ただ、検討すべき課題として、札幌がアートの都市というブランドを持つことはいいのですけれども、そのブランド化をする場合に、トップアーティストを持ってきて、札幌では非常にクオリティーの高い作品が上映されたり、作品が見られるというイメージか、それとも、札幌というのは色々な芸術の活動、アートの活動があって、もちろんクオリティーの高いものからアマチュアの活動まで幅広く支援している、いつ行っても行われているというイメージなのか、そのイメージづけを考えなければいけないということがありました。

2番は、今言った初代のアートセンターは、私の書き方だと編集局だけではなく、シアターの運営もしなければいけないでしょうし、色々な仕事があると思います。それは、2回目の円卓会議で機能的なことを考えていただいているので、それをどういった形で実践するかどうかわかりませんが、それと、私たちが今考えているようなコンシェルジュ的なものとの整合性ですね。さっき言ったように、もしこれが財団の仕事になるのであれば、財団そのものの運営の仕方というか、仕事の仕方がどこかで問題になってくるだろうと思います。

創造都市さっぽろについては、私たちが考えている創造都市と、メディアアーツのユネスコで登録された創造都市さっぽろとは、ちょっと水準が違う感じがします。実行委員会がやっている創造都市さっぽろのことと、私たちが言う、札幌は、創造性にあふれた、アイデアにあふれた、クリエイティビティーにあふれた都市であるところと、多少ずれがあるように思いますので、ここをどう調整するかですね。

それから、5、6、7は、私の勝手なアイデアですので、いいです。この国際芸術祭のときもボランティアが活躍されました。それ以外にも美術館にもボランティアの方がいらっしゃいますし、500m美術館にもいます。K i t a r aの関係にもいますし、PMFもいますし、そういうボランティアの団体を統合することはできないので、それぞれの理念を持って活動されているわけですからね。ただ、その連絡組織みたいなものをつくって、その人たちの得意な分野で、文字どおりの特派員、記者になってアート情報の記事を書いてもらうということをやられてはどうでしょうか。

サポーターという言葉はよくないので、普通に会員でいいですね。さっき言った10万人ぐらいの会員を目指して札幌のアート情報誌を受け取りたいという人を集め、それをどう組織して、どう運営するのか、そのようなことを考えました。

こんなことを考えたのですが、尾崎委員はあと5分で退席しなければいけないので、全体の流れの中で、こういうことをもっと入れたらいいのではないかと、あんなことは必要ないのではないかとということがもしあったらお話しいただきたいと思います。

○尾崎委員 まず、南副委員長がおっしゃるように、コンシェルジュのことに関しては、これで大分肉づけされていったので、北村委員長につくっていただいた骨子の中に入っていくような形で、いいのではないかと思います。

これは、組織の運営に対して、山田委員がいらっしゃるからかもしれませんが、芸術文化財団のことは出てきましたが、この会議自体でそこまで踏み込む必要があるのかどうかは話し合わなければいけないのではないかと思います。踏み込むなら踏み込むで、いい言い方が思いつかないのですが、民間は民間の限界があるように行政には行政の限界があると思います。例えば、組織の運営というのですか、ずっと長年蓄積された管理のノウハウがたくさんあります。そういった部分では、余りよくないことも言ってしまいそうですが、コンシェルジュも含めたアートセンターは、やはりもう一個上に行かなければいけない組織ではないかと僕は個人的に思っています。例えば、3年たったら次は施設を管理する部署に行くようなルールがあるようなところはどうかと個人的に思っています。民間と行政と一緒にやっていくのか、ある程度の脳みその部分に民間を取り入れるのか、外からのプロデューサーを立てるのか、そういった工夫は必要ではないかと思えます。組織の運営のことまで踏み込むのであれば、そういったことは思えます。

ボランティア組織のネットワークは、おっしゃるとおりだと思います。実際に有志の方でそういった動きもあるようなので、そういったところと連携を取りながらという形になると思うのですが、先生がおっしゃるとおりかと思えます。

アートセンターの早期の運営の開始というのは、恐らく、この円卓会議以外でも色々なところから出てきている話だと思います。色々なところから案が上がっていながら、その動きがなかなか見えないことに対しては、一言あってもいいのではないかと個人的には思えます。

○北村委員長 ありがとうございます。

組織の問題と、アートセンターがどういう形で運営されるのが好ましいのか、私も色々考えはあるのですが、アートセンターを含めてコンシェルジュをどういうふうな組織にするのか、この円卓会議で踏み込んで議論するか、どんな議論をするかということですね。それから、ボランティアの問題にご賛同をいただきました。ただ、アートセンターがなかなか設立されないことに対しては、私たちも何か一言残しておくということですね。

ここまでで、アートコンシェルジュがどうして私たちの円卓会議で中心的なテーマになったのかということの確認はできたと思いますが、私が書いたもので言うと、議論の経緯と第3回の円卓会議の基本的な考え方のところをご覧いただきたいと思えます。

コンシェルジュの細かな仕組みまではここで一々議論する必要はないという気がします。その働きとして、誕生をばらまくだけではいけない、理念として編集作業が必要であるとか、企画力が必要である、取材能力が要る、栄養が必要ということを取り上げておけば、それ以上に、こうやれ、ああやれというのは差し出がましいと思えます。

○南副委員長 コンシェルジュとしてまとめるのではなくて、今おっしゃったように、情報を提供しなければならない、この情報を提供するにおいて、編集能力を持っている、営

業能力を持っている、それから、おっしゃられた部分を統括している者が必要だということをご提案することではないかと思えます。それらをどういうふうに全体の大きなテーマの中で組んでいくかをこれから話していったほうが早いと思えます。そのときに、今、委員長からいただいた北村素案に沿って、これについてどういうふうにコンシェルジュの問題を入れていけるか、あるいは、これをもとにどういうふうに皆さんに肉づけしていただけるかという話をいただいたほうが早い気がします。

○北村委員長 どうでしょうか。皆さん、ここをこうしたらいいとか、ああしたらいいというところがありますか。

○石川委員 基本的に、北村委員長の骨子案に沿っていく形でいいと思えます。

私があえてここでコンシェルジュのメディアであると言って、ややイメージ的でわかりづらい部分が出ていたのですけれども、僕の中では、市民の問い合わせに対応してくれるというところがポイントだと思っています。もとのコンシェルジュという議論をしたときに、市民に情報が行き渡っていないところがあって、僕は、市民が気軽にアートや文化についてコミットできる、コンタクトできる存在としてのコンシェルジュをすごく重要に考えています。普通に紙メディアとかウェブメディアだと、基本的にこちらが発信だけで終わってしまうのですが、コンシェルジュという窓口があることによって、市民からもアートに関する色々な意見がもらえるとか、それに基づいて、札幌市も市民の生の声がかかることによって、創造都市の市民への浸透性のレベルをはかることができます。

相談に応じる中で、札幌市もアートを色々やっているのですよということを同時にPRできると思えます。私も、素案の中で質問対応という項目をつくったのですが、アートセンターの中に、そういうことを気軽に聞ける受付カウンターがあったり、ウェブとか電話とかメールで気軽にアートの質問ができるような問い合わせ窓口があること自体が大きな目玉になるのではないかと考えますので、その辺もアピールできればと思えます。

○北村委員長 私のところで言うと4. 3で、前に保険の窓口みたいなという言い方をしましたが、問い合わせや相談窓口ですね。これは、色々なレベルが考えられますね。あの作品はどのようなものですかというところから、うちの会社のロゴをつくってもらいたいという仕事に結びつくところまで、色々なレベルがあると思えます。

○南副委員長 市民から、こういうことをやりたいということがあったときも対応してくれるところが必要だと思えます。

○北村委員長 私も、相談窓口的なものは考えていました。私が書いたものでは、前に皆さんにお配りしたことがあります。コンサルタント業務を考えたのです。

前の報告書の素案の3ページの④で、コンサルタントで、アートによる個別の事案の解決窓口です。これは、かなり専門的なところでしょうけれども、こういったところから、あの作品はどのようなものなのですかという問い合わせまでするものがあるといいですね。

ほかにどうでしょうか。

○清水委員 今のお話ですが、メディアとは何かを突っ込み出すと、アートとは何かと同

じて、どつぽにはまってしまうので、余り触れないほうが良いと思います。

メディアとしてのアートセンターのメディアは、マスメディアの意味に偏り過ぎていると思うので、情報編集局という感じの認識にしてしまうのはもったいないと思いました。マスメディアではなくメディアというのは、特に20世紀後半とか今の時代でメディアというのは、多分、人々が直接見ることができない遠くのものとか、実際に形がないものを感じたり見たりするための媒体であって、よく見えていない人の老眼鏡や眼鏡であったり、聞こえない人の補聴器のような感じで、札幌のアートに特化して言えば人々がうまくわからないものを増幅してあげる感覚器みたいなイメージのことも、ただのマスメディア的なもので情報編集局と言うより、メディアという意味合いをもう少しつけたいと感じました。

ブランド化につなげて、札幌が創造都市、芸術都市であることのブランド化することというのを自己認識、他己認識することだと思います。ブランドというのは、多くの人がそれに価値があるとか、いいものだと思っているからブランドになるのです。ブランドは、みんながいいと思っているということだから、多様性がうまく合致するのかよくわかりませんが、ブランド化したいという札幌の創造都市戦略を否定するところではございません。

どうしてみんながブランドをいいと思うかという、例えば、私が若いころにルイ・ヴィトンに憧れたのは、雑誌でみんなが持っていて、セレブが持っていて、いいと言っているからいいものだと刷り込まれて、そこに雑誌というメディアが媒体として入っているのです。そういう価値観をつくるために必要になってくるものなのだろうと感じました。

まとまりがないのですが、感想的な補足です。

○北村委員長 私は、おっしゃるとおり、マスメディア的なことで考えていました。もちろん、おっしゃるメディアの意味はわかりますので、そういったことももう少し入れたらどうかということと、ブランディングと多様性のかかわりですね。多様な価値と、ブランドは言ってみれば一元的な価値づけの方向ですが、それが合わないのではないかとということですか。

○清水委員 合わないというか、難しいので、今考え中です。

○北村委員長 メディアのことで、どなたか何かありませんか。

○南副委員長 今、メディアのことをおっしゃられたわけですが、極端に言ってしまうと、これは手だてがメディアなのです。要するに、窓口がフェース・ツー・フェースな状態から、インターネットを使ったメディアまで全てのレベルにおいてあることを語るということで済むのではないかと思います。例えば、お年寄りの方にとっては、インターネットからの取っつきはイメージがとりづらいという人もいらっしゃると思います。それが直接そこに行けば対応してもらえるということで、今おっしゃった補聴器としてのメディアみたいなものとか、老眼鏡としてのメディアみたいなものを語ることはできるのではないかと思います。

○清水委員 フェース・ツー・フェースでということ、マスではなく、本当に個別とい

うことですね。

○南副委員長 それも、そこに行けばあるということではないかと思えます。

それから、ブランドの話が出ました。実は、北村委員長の5. 1のトップ・アーティスト/アマチュアの優先性の問題とかかわってくると思います。僕は、この両方が必要なと常に思っています。私たち市民それぞれが、北村委員長がおっしゃるように、そこにアートが普通に転がっているのだよ、参加できるのだよというような意識を持つことも大事ですね。

また、札幌にトップアーティストが住んでいるという状態も実は必要だと思っています。結局、うちの大学でもそうですけれども、優秀な人が出てくるが、彼らは札幌にいないで、みんな東京あるいは海外に行ってしまうのです。それを引きとめる方法はないのかという気持ちがあるわけです。あるいは、札幌に住んでみたい、仕事をしてみたいと思うアーティストが来てくれるようなまちにしたいという思いもあるので、このブランド化は両方必要だと思っています。そしてまた、そういう人たちが来て何かやることを受け入れる素地をつくる、そういう人たちが住んでいることについて、札幌市民がある意味でプライドを持てる、うちのまちにはこういうものがあって、こういう人がいる、あるいは、こういうようなアートができているのだ、そういう人たちがむしろ国際的なマスメディアに登場するようになる仕掛けも実は大事かと思っています。

○北村委員長 ありがとうございます。

私が書いたものの1枚目から2枚目にかかるころですが、私たちは、アーティストとしては暮らしていませんが、そういう私たちにとっても札幌はアートのまちでとても楽しい、アーティストとしてこの札幌で生活がちゃんと成り立つ、その両方が必要なのかと思います。

これは、きょうの午後に書いたものなので余り深く考えていなくて、札幌という都市のブランディングまでは考えていませんでした。ただ、札幌は、PMFも、今やっているアートステージも、市民ギャラリーの活動も、雪まつりもあるので、1年を通じてアートのまちである。11月になったらアートステージがあるし、7月になったらPMFがあるし、2月には雪まつりがあるし、ライラックまつりもあるし、菊まつりもあるし、チ・カ・ホではコンサートもあるというように、札幌のまちはいつ行ってもアートの行事をやっているよねというイメージが植えつけられる程度でいいのかなと思います。そこまでしか考えていないです。

ほかにどうでしょうか。

○尹委員 こう見てみると、札幌はかなりアートなまちだなと思います。雪まつりもそうだし、PMFも全部そうです。今、清水委員の話を聞きながら、新しいものをつくり出すこともすごく大事ですけれども、北村委員長がおっしゃった雪まつりやPMF、ライラックまつりもそうですし、今度あるミュンヘン・クリスマス市もそうですし、ちょっと前は新千歳空港で何かやっていました。私は、芸術祭のボランティアをやったのですけれど

も、かなり浸透力がなかったというのが正直な実感です。私の周りでこれをやっていることを知っている人は一人もいなかったという悲しい現実を目の当たりにしました。

新しいことをつくり出す、考え出すことも大事ですが、やはり、今あるものを特化して、ブランド化ではないですが、さっき南副委員長がおっしゃった、いい人材ができて海外や東京に行ってしまうという話を聞きながら、ふと、大泉洋を思い出したのです。あの人は、東京で頑張りながらも、札幌、北海道を愛して、北海道の活動も地道にしているというところで、海外や東京に行ってしまうと、こういった大きなお祭りやイベントごとにそういった人たちが北海道に恩返しをしている。そして、北海道出身のこんなすばらしいアーティストがいますよと宣伝することもできるし、本人たちが発揮できる場でもあると思うのです。話が広がってしまいましたが、今ある大きなアートなイベントをもっと特化していくことに照準を合わせることも大事ではないかと思います。

委員の先生方がおっしゃるように、色々なことを話し込んでいくと、私たちが話すべきところでないところにどんどんはまっていくような気がします。南副委員長がスマートにまとめてくださった形でいいと思います。あとは、私が言ったような今ある大きなイベントですね。確か雪まつりは世界三大雪祭りの一つです。こんな札幌に海外からも人が集まって、雪一つであんなにアーティストチックなイベントはなかなかないと思います。ですから、そういうところをもっともっと活用して、よく雪像をつくるボランティアを募っているのですけれども、毎年やっているイベントなので、もっとおもしろいことをどんどん提案して、今あるイベントをもっと楽しい大きなものにしていけば、おのずと札幌市民もアートを感じられていくのではないかと思います。

○北村委員長 札幌市民は、雪まつりがアートだとは思っていないのです。

○伊委員 私は外から来たので、雪まつりを見に行くのですけれども、市民は意外と見に行かないのです。だから、見に行くお客さん呼び込むよりも、そこでできるイベントがいっぱいあればいいなと思います。

○北村委員長 現在よりコンテンツをもっと充実させて、それを広めていくということですね。これも、雪まつりの実行委員会がいて、シティ・ジャズの実行委員会があって、何々の組織があって、個別にばらばらになっているので、それを共通化するというと、すぐ組織の実行委員会の問題になってしまうのです。でも、SAPPORO（サッポロスマイル）ではないのですけれども、そこで共通のロゴを張ってもらおうと。そのロゴがPMFにもくっついているし、アートステージにもくっついているし、シティ・ジャズにもくっついているし、演劇シーズンにもくっついているみたいな形で、このロゴはいつでも見るねとか、例えば伊委員がアマチュアでこういう公演をやりたいと申請すればそのマークをつけられるとか、そして、そういう情報をどこかに集約して、編集して、発信することが必要だと思います。

ほかにどうでしょうか。

○鈴木委員 方法論の話しか頭の中に出てこないのですが、先ほど北村委員長がおっしゃ

ったように、ブランディングを成功させるのは、札幌と言われたときに、あのアートのところねとぼんと頭に出てきたときが、多分、ブランディングが成功した瞬間ではないかと私は思います。

確かに、私も浅く広く触れていくタイプなので、芸術の中でも音楽とか美術とか色々なところに行ってみても、組織がすごく細分化されていて、細かく色々なところにいっぱいあって、でも、実は微妙なところでそれぞれちょっとずつつながりがあるという薄い輪しかないのです。細かく分かれている組織をしっかりとつなぎ合わせることによって、今あるアートイベントをより特化していくことができるのではないかと思うのと同時に、さっき北村委員長がおっしゃっていた5番のなおも検討すべき課題の5、7のアートボランティア組織のネットワーク化の統合の話ですね。ここも、シティ・ジャズだけとかPMFだけとか、結構細かく分かれているところだと思います。そういうのではなくて、そこも全部ネットワークを通じさせてしまったほうが、もっとみんな共通認識を持った状態で進めていくことができるのではないかと思います。

○北村委員長 各組織の連携あるいはボランティア組織のネットワーク化ですね。ただ、連携するというのはそのとおりですが、では、どうすればいいのか困ってしまいますね。私はシティ・ジャズのボランティアをやっているけれども、こういうほかの世界もあるのだなと広がって見られればおもしろいですね。そのためには情報がなければいけません。こういうところでもボランティアをやっている人がいる、500m美術館でもボランティアをやっている人がいる、私は美術のことは関心がない、PMFだけだったけれども、演劇のサポートする人もいるのか、ボランティア組織をどういうふうに結びつけるか、ネットワークをつくるかは難しいですね。

○山田委員 話題提供と言いわけをさせていただきたいと思います。

話題は、今の雪まつりの関連です。それこそ実行委員会が色々あるのですけれども、来年2月の雪まつりは、皆さんもご存じのとおり、自衛隊の力が少し減るかわりに、西5丁目のステージで、観光の部署を中心に商工会議所とやっていることがあります。さっき伊委員からお話がありましたけれども、札幌は、観光客が多くて、最終的には250万人ぐらい来るのだそうです。そんなに集まる場所はないと思うのです。ただ、観光客だけ集まっているところに地元札幌の方々がもっと行けるようにしようよという動きがあって、今、進めているようです。

何をするかというと、地元の人を中心に、人形オペラと言いまして、小樽出身でチェコを拠点に活動していまして、教育文化会館ではよく人形のフィギュア・アート・シアタ！をやられている沢則行さんという方が芸術監督になって、1日3回ぐらいやっていくというものの準備を進めているようです。まずは、それにかかわる人たち、いわゆる舞台裏の人も地元の人たちです。

題材は、「雪の国のアリス」です。今、プロジェクトマッピングが華やかしきころですけれども、そうではなくて学校で使うようなOHPで、教育文化会館に大きな画像を映し

出せるものがあります。本当は持ち出しをしたらいけないのですけれども、持ち出してやってみようということで、今、歌をつくったり、衣装をつくったりしているところです。

まず、それを西5丁目でやることで、地元の人にも興味を持ってもらい、かつ、250万人が集まる場所でアーティストの方々、制作にかかわる人たちも自分たちがやっていることをたくさんの人に見てもらおうという気概を持てる機会かなということで、今、進めています。

この話題は、夏になる直前にプレス発表がありましたので、そこで一回出たのですけれども、今、秋になり、間もなく冬というときに、ちょっと話がないのです。いわゆるメディアの情報の花火が1回上がったけれども、それを持続するには絶えず情報を発信していかなければいけないという実例かなと思います。

まず、雪まつり関連の話題というか、私がわかっていることが一つです。

もう一つは、話がずれますけれども、先ほど北村委員長がありました芸術文化財団の情報発信の関連です。

私がもう少し若いころ、さらに若手の人たちが、もっと横断的にできないだろうかということの中で提案したのです。最終的には、今、我々のところは、芸術の森、K i t a r a、教育文化会館は、言ってみれば建物に人がついているような感じです。若手の皆さんが目指したのは、きょうの仕事はK i t a r a、あしたの仕事は芸術の森、その次は教育文化会館と、自分の席がないような、どこでもプロジェクトをどんどん組んでやっていけたらもっと芸術文化の発信はおもしろいねという提案がありました。

でも、残念ながら、その話をした当時は、それこそ平成30年の複合交流施設の話もなかったですし、アートセンターの話題もなかったときだったので、上の人たちと言いましょうか、組織を考える管理側としては、教育文化会館は教育文化会館のことをまずは一生懸命やるということで今に至っています。

もう一つだけお話をしますと、情報の雑誌ですが、芸術の森、K i t a r a、教育文化会館の情報を集めたアートレターというものをしばらくやってみたのです。そうすると、それをつくる部署のスタッフが結構忙しくて、最終的には表には出ませんけれども、つくるのが結構大変だということが理由の一つでやめたのです。3施設に、市民ギャラリーと宮の森の彫刻美術館の情報も入れましたけれども、それができたからといって各部署で広報がなくなったかということ、結局、残ったのです。K i t a r aは「K i t a r a N E W S」があるし、教育文化会館は「教文ニュース」、今で言うと「楽」という情報誌とか、芸術の森には「ルア」、その前は「ガッシュ」というものでした。

ですから、情報をまとめたものをどうやるかということ、なかなか難しいなという言いわけといえますか、状況をお話しさせていただきました。

私が思うに、観光文化ステーションで発行している常時ペーパーがあります。こういう大きさを何ページかのものがあるのですけれども、そこには、市内で何をやっているという情報が載っています。そこに行ったら、たまにとってくるのですけれども、今、私が所

属しているところだけではなくて、スポーツなど色々な情報が載っています。

ただ、そこから何を選ぶかがまた難しいのです。私の場合は、こういう仕事をしているので、違うところから色々な情報を見つけるのですけれども、いっぱい羅列されている中から何が楽しいだろうかと選ぶのは結構大変だと思っております。しかし、そういうものも一つありますので、今あるものの活用をもう少し考えていくと、そこを突き詰めるとメディアにもなるでしょうし、コンシェルジュの機能にもくっついていくと思いました。

長くなりましたが、状況の話題提供をさせていただきました。

○北村委員長 ありがとうございます。

フリーペーパーをつくるのも難しいことはわかっています。

ほかに何かご意見はありますでしょうか。

○富田委員 色々な話を聞きながら考えていたのですが、啓発という言葉もあって、啓蒙という話もあります。

やはり、僕が気になるのは、何でもいいというのは危険だと思います。そこには何が足りないかということ、色々やってみようという息詰まるのは、評価とか価値づけがなされない限りは、ブランディングという言葉もそうですし、産業とは結びつかないと思います。それをきっちり見ていって、それが何になるのか、何とつなげていくのかの価値づけがされて初めて、それが札幌らしさというブランディングになります。それは、ほかとは違う唯一無二のものだから評価されることになります。

そういう意味では、今、啓発という言葉でとどまっているのですけれども、大きく必要だと思うのは、やはり人材育成に関することなので、学びだと思います。学びというと、余り楽しくないと思われがちですが、ある人が、フレンチレストランに行って食べ方を学んで、こういう順番で食べるというルールを知っていると、より楽しくなるという話をしていました。多分、アートも、かなり相乗効果的に楽しくっていくということを言われていまして、僕もそれはよくわかるのです。学びがあるということは、それをプロデュースする人がいて、それをちゃんと見出す目ききの人が必要です。だから、先ほどの話にも出てきましたけれども、簡単に誰か呼んでくれればどうにかなるというのは、ちょっと情けないと思います。

何をもちょうこういう人たちを呼んでくれればいいか、トップダウンがいいかどうかわかりませんが、芸術祭で言えば、坂本龍一さんがいて、2人のアシスタントキュレーターがいてという構造で成り立ってしまっていて、お祭りですけれども、3カ月間、その形ができました。

これは、反省点も非常に多いです。先ほど言った広報の不足とか、組織としても坂本龍一さん直結のプロジェクトもあったり、プロジェクト同士のやりとりがなかったり、美術館同士のキュレーションの不足も言われています。これは、今月に入って振り返りの本が出ますので、それをまとめている最中です。これを材料にして、どういうふうに組んでいいか、これはコンパクトなモデルにはなると思います。

北村委員長にすぐまとめていただいて、これができていたら本当に素晴らしいのではないかと思います。では、何から手をつけていくのかということに入っていきのかなということは何となく考えていました。

○北村委員長 お話はわかるのですが、それをどこに組み込めばいいでしょうか。評価の問題と教育の問題ですが、私が啓発で書いたのは創造性に気づくということですが、アートの評価に関しては、4. 3の1. 4で、論説する、批評するというので、批評家を育てるというのもとても大事なことだと思います。

○富田委員 例えば、そこが言ってみればディレクショナルリー、地域のある人、物すごく活躍している人を呼んでくることも大事ですが、今ある教育機関などとの連携ですね。それも難しい問題で、時間がかかることなのです。人を育てるというのは、すぐに呼んで来ればどうこうというものではないような気がします。そこをきっちり共有、連携していく形をとって、目指すところを共有することがすごく大事なような気がしています。

○北村委員長 ありがとうございます。

ディレクションしたり、クリティックしたり、エバリュエーションする人を、札幌が自分でやれるということですね。今回の国際芸術祭も、失礼な言い方ですが、基本的に外部から入ってきました。そういう人が3年後に向けて札幌に残ってくれたらいいなと思うのです。あるいは、そういったところで機会を持った札幌の人が色々なところで活躍していただければいいなと思います。

ほかにどうでしょうか。

○南副委員長 皆さんのお話をお聞きしていたのですが、まず、K i t a r a、芸森、教文の連携は難しいという山田委員のお話がありました。この部分は、ここで私たちの中で提言していくとしたら、石川委員がおっしゃった窓口の話だと思います。市民が気軽に問い合わせることができる、例えば、教文は教文、K i t a r aはK i t a r a、芸森は芸森ではなく、市民が問い合わせれば、それは芸森の話だね、これはK i t a r aの話だねというふうにぼんぼんといくようなシステムとしてほしいという提言になるのではないかと思います。それらをどういうふうにしたらできるかということ、異なるジャンルの横断的な組織が必要だということを提言の中に入れていく話ではないかと思います。要するに、雑誌をつくってそれを統合するという問題とは違うと思います。

そして、価値づけ、評価づけは、逆に言うと、ペーパー、雑誌の中でそれらのアートについて積極的に紹介する、あるいは、それらについてコメントするといった広い視野の中でそれをやれる、もう少し視覚的にテレビジョン的な話でそれを解説できるような人材を積極的に育てる、そういう人たちが表にもっと出てくるような仕掛けですね。アートが色々なねということに対して、ただこういうものがあるから感じてくれとか、おもしろいと思ってくれと言われても、なかなかおもしろいとは思えないわけです。そこに石ころがある、その石ころを見てくれというのと同じくらい、そういうアピールをする人たちを積極的につくるべきだという提言も必要だと思います。

○北村委員長 尾崎委員がお帰りになる前に、私は勇み足で組織論のことをお話ししました。考えるところいうところに至るのですが、言いっ放しで実際にそれをどうやって運用するのかというところまでここで議論してもいいのでしょうか。

南副委員長のお話は、ジャンルを横断するような組織情報を集約し、編集し、発信するような、あるいは、批評するようなジャンル横断的な組織が必要であるという提言にとどめておくのが穏当でありますね。

先ほど、富田委員が啓発という言葉に食いついていただきましたけれども、4. 2の2. 2のところ、この円卓会議の一番最初に南副委員長がご提案された札幌ゴミプロジェクトですね。こういう一種の問題解決型のプロジェクトを仕掛けて、ごみだけではなくて、ながらスマホ、放置自転車、少子高齢化の問題とか、色々な問題があります。それをアートで解決できるかどうかわかりませんが、例えばことはこういうテーマで色々なアイデアを出してもらって、それを1年間あるいは2年間かけて、その成果をアーティスティックに発表するみたいなことがあってもいいと思います。

○富田委員 そういうことを考えたときに、やはり同じテーマとしてそれを結びつけて考えていくということが大事になってくると思います。

札幌には、既に色々なイベントがあり、楽しまれていて、それをくっつけていくというか、あれもこれもアートとしてやってしまえばいいということには違和感を持ちます。それよりも、何が大事で、何をメッセージとしているのかを大事にして、それが色々な形になってしまうほうが説得力があるような気がしています。後づけでこれとこれとこれを見つけてきたからくっつけて一つにしようというのは、話が全然違ってくるような気がしています。だから、色々なリサーチをし、アーカイブを見た上で何をすることが大事で、そこら辺が欠けているところではないかと思っています。

札幌は、やはり新しい年と言われてますし、歴史がないと言われて、それが非常にコンプレックスだったりするのです。しかし、それは自分たちがつくっていくもので、札幌でやられていることに札幌の人が行かないのは、もう少し知っていけば楽しくなることはたくさんあると思います。思いつきですけども、文脈というのでしょうか、歴史というのでしょうか、リサーチというのでしょうか、アーカイブをしっかりとっていくのも一つ重要なことかと思っています。

○南副委員長 一つの方法として、例えばアートディレクターみたいなものを2年制とか3年制という期限つきで、札幌市に対して、今回はこういうテーマでやっていこうとか、こういうことをモチーフにしようというようなことを発言するのも一つの方法だと思います。その中で、既成の色々なイベントや企画があるわけです。そのテーマだったら乗るよというのは、それぞれのイベントの実行する人たちが決めればいいと思います。これは違うから乗れないとか、これだったらいけるなとかね。それで、そのときによって集まるということで、いつも同じようなテーマではなくて、1年、2年、あるいは、ディレクター自体も色々なタイプの人がかっこかわることによって、毎年同じではなくて違うものが

色々次々に出てくる。そのほうが刺激があっておもしろいと思います。

もう一つ言うと、前に札幌らしさということをおっしゃられました。雪まつりは、世界中を見ても、これくらい大きなまちでこれだけ雪が降るところはないのです。それだけで非常に特化した財産になっているわけです。このアートというものよりも、札幌ならではのものは、北海道の中で大きいまちだからつくりやすいけれども、日本全体を通して札幌だからこそある、札幌にあるというような特化したものを何か見つけることもアートを宣言する意味では大事かと思います。

○富田委員 芸術祭がいいか悪いか、その価値や評価はわかりませんが、中谷宇吉郎さんの雪の作品をやられたことによって、低温科学研究所とか、雪に対する意識ができたと思います。その前に、中谷芙二子さんという娘さんが来たときから、この札幌とどういうふうにかかわりを持ってやっていたか、世界とつながる話もされていたのですが、そういうのはなかなか聞ける機会がないです。自分たちが余り見ていなかったものが、切り口によっては、もしくは、一つのサロンだったり、トークだったりするのですが、そこをしっかりと戦略的に考えてやることによって、非常に興味深いというか、深さが出てくるような気がしています。

○北村委員長 札幌のアートは、4. 1. 1のところで思いつくまま挙げたわけですが、ある程度、文脈をつけて、札幌らしさみたいな演出も必要かなという話です。

アートセンターのディレクターを誰にするのかはとても大事な問題だと前に議論しているのですが、コンシェルジュに携わる人とアートセンターの中心になる人という関係になるのかもまだ見えません。ですから、コンシェルジュが丸々アートセンターになるわけではないのかなと思うと、どういう位置づけになるのかが僕にはまだ見えないうところですが、でも、アートセンターのセンター長なりディレクターがどういう人になるのかはとても大事なことだということはわかります。

いつも、こういうところで清水委員に最後のおまとめいただけるのですが、今日はどうですか。

○清水委員 最初に戻りますけれども、私も尾崎委員や南副委員長の意見に近くて、細かい運営の話は実現性を高めるためにそこに突っ込みたいのだと思いますけれども、言い方は悪いですが、私たち部外者の提言がどこまで実効性があるか、よくわからないのです。実効性のために提言するのだけれども、実効性があるかわからないというところは、少しさらっといったほうが良いと思います。

前半に「定義」と「理念」という言葉が出てきて、これはどういうことを指しているのかなと思ったのです。アートコンシェルジュの定義よりも理念をもっと詳しく突っ込みようかという話だったかもしれませんが、定義と理念は何かとっていました。理念は理想で定義が現実に近いものかなと思ったのですが、現実的なものをすごく重要ですが、理念、理想、高い目標みたいなものを委員会という組織では極めたほうが良いのかなとも思うのです。

理念という言葉の捉え方が合っているかどうかわかりませんが、来年に実行できることを話しているのではないですよ。理念は、これからの方向性として少し高目の目標設定という形で何か提案していくというのが委員会の提案としてはいいと思います。創造都市の実質化するためにどうしたらいいのか、足元の現実に即した細かい提案をするのではなく、少し大き目に視野を広げてつくっていくといいかなと思いました。

○北村委員長 ありがとうございます。

時間がもうありませんので、こういう形で皆さんにお伺いしますが、私たち第3期の報告書のタイトルです。例えば、創造都市さっぽろの実質化のためとか、アートの都市としての札幌のブランド化の実現とか、日常性の芸術化とか、アートと創造性をみずからのものにするためとか、報告書のタイトルはどうしましょうか。

○山田委員 タイトルは、言い方はプラスアルファする必要があるかもしれないのですが、南副委員長や北村委員長がおっしゃっていた、アートの都市として札幌をブランド化するという部分をどんと出してほしいと思います。ただ、「実質化」という言葉が捨てがたいです。もう一つ、北村委員長の日常性の芸術化の部分をアレンジできたら格好よくなると思いますけれども、いかがでしょうか。

○北村委員長 最終的には、次回、こういう表題にしましょうという看板をかけられればいいなと思います。その辺もお考えいただきたいと思います。

○南副委員長 せっかくアートコンシェルジュをたくさん話し合ったので、これも何かの形でぜひ反映していただきたいと思います。

○北村委員長 では、次回は1月ごろです。

先ほどの清水委員の意見では、細かなところより、むしろ骨太な議論をして報告書をまとめればいいのかという気がします。ぜい肉はそぎ落としてマッチョな感じの報告書を作成したいと思います。次回の会議で、最終的なタイトルなども含めて完成としますけれども、私はぜひ作文してみたいという方はいますか。

○南副委員長 副委員長としましては、今度はぜひ委員長にやっていただきたいと思いません。

これは、石川委員が色々と考えてくださったものをもとにして、北村委員長の素案ができて、今、私たちはそれについて肉づけをしたわけです。その文章化はぜひ委員長にお願いしたいのですが、どうでしょうか。

○北村委員長 ちょうど卒論の時期ですが、私自身も卒論を出さなければいけないという話になりました。卒業させてもらえるかどうかわかりませんが、覚悟しました。なるべく早く文章をつくって、次回までには皆さんに目を通していただいて、たくさん赤を入れていただくことを条件としてお引き受けしたいと思います。よろしくお願いします。

### 3. その他

○北村委員長 それでは、次回のスケジュールなどを事務局からご連絡いただきたいと思

います。

○事務局（高橋調整担当係長） 次回は、1月中旬から下旬を予定していますが、本日、日程調整表をお持ちいただいていると思いますので、皆様の日程調整表を確認させていただいて、また日付をご連絡させていただきます。

それから、イメージとしては、北村委員長の素案を年内くらいにいただきまして、各委員にお送りさせていただきます。そして、修正点やご意見をいただきまして、それをすべて集めたものを次回の資料として最終的にお渡しさせていただきます。1月中旬から下旬に会議があるので、それに間に合うような形で考えております。

それから、次回は第7回になりますが、第8回の最終回のアナウンスもさせていただきますと思います。

第8回は、市長に対して第3期の円卓会議の報告書をお渡しする機会となっております。この会議はこれまでずっと6時から始まっていたのですが、第8回目に関しては基本的に平日の日中で、市長のあいている時間帯を狙って、できるだけ多くの委員に集まっていたような日付でとなります。何分、市長も忙しく、1時間程度確保したいと思いますが、もしかすると委員が集まりにくい時間帯になってしまうこともあるかもしれません。そのあたりは、次回の委員会でも調整させていただきたいと思います。とりあえず、平日の日中になるということだけはアナウンスさせていただきます。2月中旬ぐらいが一旦の目処かと思えます。

こちらからのご連絡は以上です。

○北村委員長 ありがとうございます。

皆さんから、何か言い忘れたということや連絡したいことはございませんか。

（「なし」と発言する者あり）

#### 4. 閉 会

○北村委員長 これで、第6回札幌文化芸術円卓会議を終わりにいたします。

長時間、どうもありがとうございました。

以 上